+博論書式４（論博書式４）

平成　27 年　1 月　14 日

# 博士論文の審査結果の要旨

| 専攻 | 保健医療学専攻 | 分　　野 | 看護学分野 |
|---|---|---|---|
| 学籍番号 | 12S3032 | 院生氏名 | 重久　加代子 |
| 通学キャンパス | 大田原キャンパス | | |
| 論　文　題　目 | がん看護におけるケアリング行為を基盤とするケアリングの構造 | | |
| 審査結果（枠で囲む） | 合格　　不合格 | | |

＜審査結果の要旨＞

研究の概要：本研究の目的は、がん看護におけるケアリング行為を基盤とするケアリングの構造を明らかにすることである。ミックス法を用いて、ケアリングの概念分析、ケアリング行動質問紙の作成と看護師・がんサバイバーの認識の把握、看護師・がんサバイバーを対象としたケアリング行為の抽出を行った。本研究は、本学倫理審査委員会の承認を受けた。結果、がん看護におけるケアリングは８要素 42 行為からなり、その構造は、「双方向のコミュニケーション」と「人間的な親しみを感じられるかかわり」を基盤に、「対象者の尊厳を遵守し対象者と看護師の限界がなくなるような関係」「対象者と家族が安心して療養できる環境の調整」「対象者や家族の状態を予測した支援」「主体的に療養するために必要な情報の提供」「ケアリングの価値を認めるチーム医療体制」「対象者の人格を尊重しアートとサイエンスを駆使したケアの実践」がブロックのように積み重なって一体化していることが明らかになった。

新規性と価値：：ケアリングは看護学のみならず教育学や倫理学等において注目されている概念であるが、その研究は抽象度が高い議論となり、がん看護におけるケアリングとなるとさらに進展しているとは言い難い。著者は修士課程のときから一貫してこのようにむずかしいテーマに果敢にチャレンジし続けており、質問紙の作成とケアリング行為を構造化した点は評価できる。また、近年関心がもたれているミックス法を用いたことも新しい。導かれた結果は、 がん看護におけるケアリングの実践と研究に貢献する研究として高く評価できる。

審査経過：口頭試問は３回開催した。第１回（12/10）では、質的研究方法や文献レビュー等について質疑応答がなされ、結果、明確になった課題について加筆修正することとなった。第２回（12/25）では、修正論文はわかりやすくはなったが、「アートとサイエンス」という表現はより独自性を出す表現がよい、文献レビューに主張がない、「構造」をもっと強調すべきである等の指摘がされた。第３回（1/9）では、前回指摘事項は修正され、論文として整理されたと評価された。いずれの回においても、著者は質問に対して自身の考えをきちんと述べ、内容も適切であった。

合否結果：以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分価値があるものと認めた。

| 論文審査担当者 | 主　査　　福島　道子 |
|---|---|
| | 副　査　　亀口　憲治 |
| | 副　査　　吉岡　さおり |